

芸術家による福祉職員への研修を通して、 ご利用者の表現や人生を理解する

総合福祉施設 東九条のぞみの園

〒601-8005 京都府京都市南区東九条西岩本町 1-1

助成事業の概要

本事業は、芸術家による研修や継続的な協働を通じて、福祉職員の「観想力（ご利用者の表現や人生の背景を推し量る力）」を高め、ご利用者の思いに深く寄り添うケアの実現を目的としました。事業は年間を通じて展開し、ご利用者との直接的な表現活動（8 月の夏まつりポスター制作、1～2 月の藍染等）を行うだけでなく、講師とともに各活動の企画準備や打合せ・振り返り行い、活動の意味や目的を確認する場を持ちました。また、現場での職員とご利用者の日常的な関わりを講師が見学される機会も重ねることで、講師が私たちの日々の実践の様子を把握いただきました。4 月の管理職研修・8 月の職員全体研修に加え、10 月には講師が逝去された特養ご利用者と生前に重ねた対話記録をもとにカンファレンスを実施。言葉の背景にある人生の物語を皆で推し量り、創作以外からも「観想」を深める訓練を行いました。年間を通じ、講師の伴走のもとで実践と振り返りを繰り返すことで、職員の視点に確かな変化と今後の課題を確認することができました。

事業の成果

本事業は、芸術家との継続的な協働を通して職員の「観想力」と「対話力」を高め、質の高いケアへ繋げることを目的としました。約 1 年間の実践との振り返りを通じ、以下の成果と課題が得られました。

1. 目的達成度と得られた成果、職員の感想

最大の成果は、ご利用者の「その人らしい姿」や「人生の背景」に関わりの中で引き出し、新たな一面を感じられたことです。例えば藍染の実践では、普段口数の少ない方が昔の染色仕事の経験を生き活きと語られました。ポスター制作では美しい筆さばきを披露された方が、実は通信講座で密かに努力を重ねていたという新たな一面の発見に繋がりました。また、10 月には逝去されたご利用者と講師が生前に重ねた対話記録をもとにカンファレンスを実施しました。何気ない言葉の背景にある価値観や人生の意味を皆で推し量ることで、「観想」を深める重要な訓練となりました。さらに、講師と別事業にて以前から関わりがあった職員からは「過酷な現場で縮こまりがちだった『感性』を、使っていない筋肉を鍛えるようにトレーニングできた」との声が寄せられ、他の職員の意識をリードするような発言が聞かれました。一方的な支援の枠を超え、互いの良さを見出し合う双方向のケアの視点が着実に育まれています。

2. 見えてきた課題

一方で、事業の定着には現場ならではの課題も残ります。活動中はご利用者と意識的に関わられても、日常業務に戻るとまた距離ができてしまう、意識から離れてしまうといった継続性の難しさが挙げられました。また、講師を交えて打合せや振り返りを重ねることで徐々に理解は深まりましたが、本来業務と

アート活動の目的を繋ぎ合わせて理解するまでに時間を要し、時間的ゆとりがない現場での負担感といった率直な声も挙がっています。

今後は、この活動で得た「ご利用者の現状を多角的に見る視点」を日常のコミュニケーションへと落とし込み、施設全体の共通認識としていかに波及させていくかが次なる課題です。

成果の広報・公表

本事業の広報は、主に施設の公式 Instagram を通じて行い、施設ホームページ (<https://www.nozominosono.net/>) からも見えていただくことが可能です。8 月の夏まつりポスター制作や 10 月のカンファレンス、2 事業所での藍染の実践、崇仁地域での通年の取り組みなど、活動の様子を発信し事業の周知に努めました。また、制作した夏まつりポスターは施設の正面玄関前に約 2 か月間展示し、ご利用者や職員のみならず来訪者にも広く自由にご覧いただけるよう工夫しました。さらに、未来の福祉を担う学生への波及効果も生まれました。8 月の全体研修に 3 大学 9 名、藍染の実践に 2 大学 6 名の実習生が参加しました。事業の周知と共に学びを深める機会となり、学生からは「大学の授業で『福祉と芸術の親和性』について学んだ」という声も寄せられています。その他、全 3 回にわたる夏まつりポスター制作の様子を 30 分の研修動画としてまとめました。この動画は、今後の職員研修や実習時の学びの教材として継続的に活用していく予定です。

今後の展開

本事業の目的である「観想力」や「対話力」に基づくケアの実現は、決して 1 年で完遂するも

のではなく、継続的な取り組みを通して施設風土として定着させていくものです。日々の本来業務に追われる中、また職員の入れ替わりもある中、全ての職員が一斉に同じ理解度で理念を吸収することは容易ではありません。そのため、まずは今回の事業で確かな気づきを得た職員を軸とし、彼らの実践や視点の波及を通じて、少しずつ周囲へ広げていくアプローチが重要であると考えています。今後の展開として、職員それぞれの理解度や捉え方の違いに配慮しつつ、引き続き意識的に研修機会を設けていきます。同時に、日々のミーティングや会議の場においても振り返りの時間を確保し、レクリエーション等の日常的な関わりと「観想」の振り返りを結びつける仕組みを構築します。実践と振り返りのサイクルを日常に落とし込むことで、ご利用者の思いに深く寄り添うケアが施設全体に根付くよう歩みを進めてまいります。